

第2回看護研究会 (看護補助者教育研修会)

- 日 時 令和6年8月20日(火) 10:00~16:00
- 出席者 48病院117名・委員13名
- 開催方法 ハイブリッド開催 (会場：岡山県医師会館 401会議室)

講演 対人援助の基本 ―尊厳のある関わりとは―

講師 川崎医療短期大学 医療介護福祉学科 学科長 山田 順子 教授



「『あなたに出会えて良かった』そう心から感謝され、利用者の笑顔や言葉が力になる。人生の終末期に携われることは、介護福祉士であるから経験できると思う。どれだけ相手の立場になりニーズを満たすことが可能か。だからこそ、日々の関わりを大切にしたい」(一部抜粋)、という卒業生の言葉を紹介され、介護の特性、職業倫理とは、と話が進み、グループワークが行われた。各々A4の紙に3つの絵と自分の名前を書き自己紹介をした。会場の雰囲気や和み、引き続きジェスチャーコミュニケーションが行われた。言いたいことが伝わらないということ、失語症の人の気持ちかわかる体験だった。

謝礼をくれるという利用者への対応は、物を見ないこと、ありがとうの言葉を伝え、物は受け取らない。

自立とは、自分自身で何でもできるようになることではなく、できないことはできないと認め、できないところを他者に依

存することで補い、自分らしく生きることが大切。

病院という場合は、治療とケアがある。患者の生活はいろいろな専門職に支えられている。一番身近で様子を見ている介護職はいつもと違う変化やちょっとした想いに最初に気づくことができる。

「伝える」と「伝わる」は違う。伝えたつもりでも、相手に伝わっていないことがある。相手が振り向く言葉で伝え直してみることが必要。

共感とは言葉で伝え返して、相手が「わかってもらえた」と感じることで初めて成立する。他者を理解しようとするとき、自身の傾向を知り、意識的に行動することが必要。嫌だ、苦手だと思う気持ちを抑えて、相手の立場を考えて行動することに対し、今日の講演が何かの役に立てればよいと締めくくられた。

(看護研究委員 早野由貴)

講演 認知症を持つ人に寄り添うコツ

講師 一般財団法人津山慈風会 津山中央病院 外来師長兼副看護部長
認知症看護認定看護師 小幡 陽子 氏



認知症とは、獲得した複数の認知・精神機能が、意識障害によらないで日常生活や社会生活に支障をきたす状態である。脳が障害されることによっておこり、障害されたところや程度によって症状も様々である。

65歳以上の高齢者の認知症患者数は令和4年では443万人、令和12年には約523万人に増加するとされている。年齢階級別の有病率では、75歳以上の階級から有病率が急激に上昇する。年齢を重ねれば重ねるほど誰もがなり得る身近な病気である。

認知症を持つ人に寄り添うコツとは、その人の世界に入っ一緒に過ごすということ。また、どのように手を持っているか、持ってほしいのか、手の持ち方で相手に伝わるメッセージがある。更に、安心につながる接し方・話し方があり、その人の感情・感覚に働きかけ、大切に思っていることを伝えることが重要。リアリティーオリエンテーションは見当

識を補い不安を軽減する効果があるが、会話の中で「今」を伝えるために、世間話など楽しく会話すること、相手の話にならずくこと、耳を傾けることがケアになる。「その人らしさ」や「個性」などを大切にする。認知症を持つ人が安心して、心穏やかに暮らすことは、認知症の進行を遅らせることができる。

令和6年1月1日、認知症基本法が施行された。「共生社会」の実現を推進するための法律であり、認知症を持っていても自分らしく生きられるよう、またできることを生かす環境を整えることを目指している。予防と進行抑制のためにできることはなにか。①フレイル予防 ②お口の健康(健康な歯と筋肉で咀嚼し呑み込んでおいしく食べる) ③良質なタンパク質をとる ④サルコペニアのチェックなどがある。

(看護研究委員 杉 敏子)